
心の奥の扉の先の可能性

天衣無縫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

心の奥の扉の先の可能性

【Nコード】

N5172Y

【作者名】

天衣無縫

【あらすじ】

生まれた日も生まれた病院も育った町も同じ。家も隣同士。そんな二人の成長を描く純愛ラブ話。どんな困難でも二人なら乗り越えていける。そしてその先に見える本当の可能性。最後には必ず幸せが待っている！

主に小学編、中学編、高校編に渡って描きたいと思います。尚、感

想や評価、お気に入り登録などぜひよろしくお願いします！

プロローグ

七月七日。とある町のとある病院で一つの産声が上がった。

元気な男の子だ。

そしてそれを追いかけるかのように一時間後別の病室で産声が出る。

今度は女の子。

時期が近いこともありその二人の赤ん坊は同じ病室になった。

互いの親は家が近い、というか隣同士のため関係は親密だった。

一週間後名前がつけられる。

男の子の名前は

『沢村 尋音』

女の子の名前は

『桜井 渚』

それが二人の出会いだった。

第一話 お隣さん ―尋音目線―

俺は沢村 尋音。今日から小4になる！

俺の兄貴は七つ離れていて高校生。去年は一年生でインターハイ出たんだ！

ちなみにテニスね。

絶対本人には言わないけど兄貴に憧れて俺もテニスをするんだ！
近くのテニスクラブの入団条件が小4以上だったから今年からやっ
と入れるんだ。

「尋音ー？なにそんなにはしゃいでるの？」

今声をかけてきたのは桜井 渚。すぐ隣に住んでて窓から少し大き
な声を出せば聞こえるくらいの距離だ。

「あー渚！だって今日から四年生だぜ？嬉しいじゃん！」

「尋音って単純だねー」

「純粹って言えー。今から迎えにいくぞ？」

「うんー！」

渚はクラスの中でもかなり可愛い方だと思う。俺の友達の中でも渚

を好きな奴って結構いるし。

「じゃ行ってきまーす!」

「気をつけなよー」

おれん家は俺、兄貴、母さん、父さんの四人家族だ。

朝は兄貴と父さんは俺よりも先に出てく。

そして走って十秒の渚の家のチャイムを鳴らす。

「あ、尋音くん。ちょっと待っててね・・・渚ー!?!」
「今行くー」

「毎日ありがとね」

「いや俺も一人じゃ寂しいから」

「ふふ。」

少し待つと二階から渚が降りてくる。

「お待たせー」

「おー。じゃ行くござ。おばさん行ってきます!」

「行ってらっしゃい」

おばさんに手を振って学校へと歩き出す。

「尋音もテニスクラブ入るんでしょ?」

「おう!あ、渚もどうだ?」

「私にあんま運動得意じゃないから・・・」
「ものは試しだよ今週末だから一緒に行こうぜ」

「ま、まあ見てみてからね」

「よし！あ、誠司ー！」

誠司、空野ソウノの誠司マコトは同じクラスの親友だ。

「あ、尋音おはよう」

「誠司もテニスクラブ入るんだよな？」

「うんボクも行くよ。渚ちゃんもおはよう」

「はあはあ尋音早いよ」

「あははホントに体力ないな」

「もーだから言ってるじゃん！」

「楽しそーじゃん」

「あ、月海おはよ」

月海こと、吉高よしたか 月海つぐみもクラスメートだ。

この四人が最近一緒にいるメンバーだ。

始業式も終わり、帰りも同じ、渚と帰る。

「渚？今日はそつちの家いっていい？」

「あーでも美咲いるよ？」

「いいよ全然」

「うん・・・」

「じゃ、ランドセル置いたら行くから」

ダッシュで部屋に行ってランドセルを投げて一階に降りる。

「渚ん家行ってくるー」

「由希ちゃんによろしくー」

「はい」

由希ちゃんとは渚の母さん。

今度はチャイムを鳴らさずに入る。

「おじやましませーす！」

「あら、尋音くんいらっしやい」

「あ、おばさん、母さんがよろしくだつて」

「希ちゃんが？ならちよつとおじやましてこようかしら」

階段を登ってすぐ右、そこが渚の部屋だ。

「入るよーつておい」

部屋に入ると渚が妹の美咲とケンカしていた。

「美咲ー！」

「やーだー！」

何やらおやつを取り合いをしているみたい。

「ケンカすんなー」

「あ、ヒロ兄ー！ナギ姉がー！」
「違うもん！それ私のだもん！」

「いいじゃんか、お姉ちゃんなんだろう？」
「えへへーヒロ兄大好きー」
「カンケーないもん！」

美咲は俺たちより五歳下、幼稚園の年中だ。

「渚にはあとでコンビニ行ってなんかおごるからさ」
「・・・しょうがないなあ。はい、ゴメンね美咲」
「ありがとう」

俺からしたら下に兄弟がいるのってうらやましいんだけどなー俺末っ子だし。

それから六時くらいまで遊ぶ。普段は五時くらいまでが門限なんだけど渚ん家に行く時だけは甘くなる。

「じゃまた明日なー」
「うんバイバイ」

下に降りるとおばさんはまだいない。どうせウチでまた長話でもしてるんだろう。

今度はおじやましましたを言わずに出る。

「ただいまー」
「尋音くんー！」

あ、あれ母さんは？

リビングに行っても母さんはいなかった。

「海斗くんが・・・」

「兄貴がどうかしたの!？」

「じ、事故にあったって・・・」

「!・・・兄貴!」

「尋音くん!」

それを聞くと俺は走り出した。病院は分かっている。この辺なら俺が生まれた総合病院だと思う。

そして病院に着いた。

第二話 なんで？ ―渚視点―（前書き）

さっそく評価してくださいありがとうございます！これからもよろしく願います！！

第二話 なんで？ ―渚視点―

「お母さん遅いなー」

尋音が帰った後もお母さんはなかなか帰って来なかった。

「ナギ姉ーお母さんは？」

「んーもうすぐ帰ってくるよ」

この会話の繰り返し。

そしてちょうど七時をまわったときに玄関の鍵が開く音が聞こえた。

あ、お母さんやっとな帰ってきたんだ！

私は美咲と一緒に玄関にダッシュ。

予想通りそこにいたのはお母さんだった。

「お母さんどうしたの？遅かったじゃん」

「海斗くんが・・・」

え？尋音のお兄さんが？

「海斗お兄ちゃんがどうかしたの?!」

「事故にあっちゃって、でも命に別状はないって、ただ・・・」

ただ？ただなに？

「もうスポーツはできないって」
「そんな・・・」

海斗お兄ちゃんは尋音の憧れでもあって、それに目標。このまま行けばプロも夢じゃないくらいうまかったのに・・・。

あ、そうだ

「尋音は？」

「病室で海斗くんとお話をしたわ・・・。一緒にいたら邪魔だろうからそこでお別れしたの」

海斗お兄ちゃんはホントにやさしくしてくれて私にとってもホントのお兄さんみたいだった。

でも尋音からしたら血も繋がってる、私よりもショックが大きいはずだもん。

私が尋音を励ましてあげなきゃ！

「まだ帰ってきてないみたいだね。」

「ええ。渚、会うなら明日にしないさい」

「うん。じゃ私宿題するから。」

そう言い残して二階に駆け上がる。

あ、やっぱりまだ尋音の部屋電気ついてないや。

・・・宿題しよう。

今日もいつもどおり、美咲が私のお腹の上に乗ってきた重さで嫌な目覚めだった……。

「ちよ、いいかげんおりてよ」

「ナギ姉起きたー？」

「うん起きたから大丈夫」

「じゃ、一緒にご飯食べよー」

「はいはい」

美咲に手を引かれて下に降りる。

「お母さんおはよー」

「おはよう。早くご飯食べて支度しちやいなさい、尋音くん来ちや

うわよ

「うん」

食卓にはピーナツツバターの塗ってあるトーストが一枚。

それを食べて、今日は尋音といっぱい話するために早く準備をする。

そしていつもより早めに家を出て尋音の家に向かう。

尋音大丈夫かなあ。泣いてたりしたらどうしよ。

そんなことを思いながらインターホンを鳴らす。

「はい、あら渚ちゃん。」

「おばさんおはようございます」

「ふふ、今日は早いよね。・・・尋音ー！」

おばさんが二階に向かって尋音を呼ぶ。

降りて来た尋音はいかにも怒ってそうな仏頂面をしてた。

「おはよー尋音」

「ああ。」

え、ああ、ってなに？よっぽど怒っちゃってる？

っていつか悲しむとかならまだしもなんで怒ってるの？

第三話 恋ばな。 — 尋音視点 —

夜の七時過ぎ。

俺は兄貴と二人つきりで病室にいた。

「おまえは頑張れよ」

「なんでだよ、なんでそんなに余裕なんだよ。」

「しょうがねーだろ？もう復帰はできないんだから。」

「ホントに諦めんの？」

「・・・ああ。」

「！・・・俺は絶対兄貴を超えてみせる」

「おまえが？ぶ、まあせいぜい頑張れよ」

「俺今週から始める。兄貴には絶対負けねえから！」

そう言っただけで俺は病室を出た。

途中母さんとすれ違ったけど俺は家に直行。

病院からは小学生の俺の足で走っても20分かかるはずに着く。

部屋の壁に寄りかかっているまだ新品のラケットを持って近くの公園に行った。

なんだよ兄貴のやつ！あんだだけ頑張ってきたテニス奪われて悔しくねえのかよ！

怒りに任せてラケットを振り続ける。

気付けばもうクタクタになってた。

その日は風呂に入ってそのまま寝た。

次の日、いつもは迎えに行くはずの渚が今度は家に來ていた。

「おはよう」

「ああ」

自分でも不機嫌な声を出してたことには気づいてた。でもなんか落ち着けないんだよな。

渚と歩く通学路も今日はなんだかちよつと気まずかった。きっと渚も兄貴が事故ったことも、もう・・・もうテニスできないことも知ってるんだろっとなあ。

「ど、土曜日頑張ってね！」

「ん、お、おう」

「私、やっぱり無理だけど見に行くから」

「そっか、ありがとな」

ちよつとぎこちないけど渚から話しかけてくれた。そうだよな、いつまでも気にしちゃういられないよな。超えるって決めたんだから。

・・・もちろんその日も素振りをした。

いよいよ入団日。

まだ着慣れない新品のウェアを着て、昨日おとといと使ったおかげで慣れて来たラケットを持って近くのテニスコートへ行く。

「今日から入団します、沢村尋音です！小4です！」

「同じく、空野 誠司です」

「よろしくお願いします」「」

パチパチと拍手をされて少し恥ずかしいような気もする。

練習はまだ基礎的なもので、まずは当たり前ながら、ルールとか、あとはフォームなどを教わった。

兄貴の試合とか見てたからだいたいこのルールは知ってた。でもフォームは少し崩れていて修正するのが大変だった。

こうして無事に入団することができた。

「あ、渚」

「あ、尋音。どうだった？」

「うん！楽しかったよ。」

「尋音に誠司も頑張れよー」

「あ、月海も来てたんだ」

何気にいつものメンバーが集まっててすこし面白い。

「俺腹減ったから帰るな」

「あ、じゃ解散ってことで」

「よし、じゃあ帰るか誠司」

「ちよ、月海。」

誠司が月海に引っ張られて行く。あいつらあんなに仲よかったっけか。

「海斗お兄ちゃんいつ退院？」

「ん？二週間後だって。」

「そっか、早く良くなるといいね」

「ああ。」

「・・・あ、そーいえばね！内緒話なんだけど・・・」

渚があきらかに無理やり話題転換をした。まあ一応気遣ってくれてるんだろっし乗っておくか。

「なに？」

「月海が誠司くんのこと好きなんだって」

「ぶっ！マジで？」

だからあんなことをねえ。なるほど、面白くなりそうだ。

「でさー尋音にも協力して欲しいんだって」

「俺が？」

「うん。一番仲良さそうだしね」

「まあいいけどね。おまえは？そういう奴いないの？」

「わ、私はいないよ！」

「ふうん」

ウチのクラスで渚のことを好きな人、ざっと数えて五、六人。ウチのクラスは40人くらいで男子はその半分くらいだから、えっと約分をして・・・四分の一の奴から好かれてる。ほんと羨ましいくらいだ。

「そっちは？」

「あ、俺？・・・いない、かな」

「えーホント？」

「ホントだったの！ま、まだ小学生なんだから焦ることはないじゃん？」

「確かに・・・」

俺たちは二人とも告られたことも告ったこともない。俺が言つのもなんだけど、やっぱまだ小4なんだし、今はテニステニス！

早く試合に出れるようになりたいなあ。

第四話 好きな人？ ―渚視点―（前書き）

更新がかなり遅れました！！

せっかく評価して下さった方申し訳ありません！

第四話 好きな人? — 渚視点 —

尋音のクラブの入団日。

言われた通りに私も見に行った。

海斗お兄ちゃんが事故にあってから尋音は少し元気がない…なんてことは無くて、見てて心配するくらい怒ってた。

でも、今日は大丈夫そうだ。

テニスをしてる尋音すっごい楽しそう!

私も運動できればなあ。

「ねえ渚?」

「どうしたの?」

「誠司ってかつこよくない?」

「へ!?!?」

一緒にきていた月海がいかにも恋する乙女として感じの目で誠司くんのことを見ていた。

「なんかさ、うん。ちょっとおとなしめなところとかクールでさ」

「月海ちゃんもしかして…!」

「あは、ばれちゃった?」

「ええええええー!」

普段あんなにいじめてる、いやいじめてるっていつちやダメだよね。

…あんなにいたずらしてるのに……あ！これが好きな相手には意地悪したくなっちゃうってことなのか！

…乙女心は複雑だなあ。

「まあいいとは思っけど、私はあんまり得意じゃないかなあ…。」

「ええ！渚分かってない！もー完璧じゃん！」

「恋は盲目…。」

「ん！？」

「あはは…でもさ、それだったら尋音のほづがいいような気しない？ほら、あんなに楽しそうでさ、見てて元気になるっていつか…。」

「へえ…渚へえ…。」

月海がニヤニヤした目で見てくる…。

「な、何？」

「まあいんじゃない？お幸せにー」

「ちよ！そ、そそそんな意味じゃ…！」

も、もう！いきなり！そりゃさつきはああ言ったけど尋音にだってダメなところがけっこうあるから！

あーもう恥ずかしい！自分でも顔が赤いのがわかるよ…。

「あはは渚って純情」

「ちよっと月海」

尋音ががんばって素振りしてる。
まあ、うん。フツーにかっこいいと思う。尋音だけじゃなくもちろ
ん誠司くんだって。

でも正直ウチのクラスでも尋音を好きな人が何人かいる…。
なんかその人たちがいわく、明るいとこ、元気なとこ、そして笑顔が
いい！ってところらしい…。

うーん。よくわかんない。

だって尋音とはほんつとに昔からずっと一緒に…。それこそ小さい
頃はなぜか一緒にお風呂入ったり…。

もーなんでこんなこと思い出しちゃったんだろ！ダメダメ！

首をブンブンと振って忘れようとする。

「なーにさっきからひとりで遊んでんの？」

そんなことを考えてたときに声をかけられてさっきよりも顔が赤く
なっちゃってる気がする。

私ってやっぱり純粹すぎるのかな…。

お風呂つて気持ちいいなあ。
なんてちよつとお年寄りみたいかな。

今日の帰り、尋音と初めて恋バナをした。
月海とあーいう話をしたあとで、尋音から好きな人いる？みたいな
こと聞かれて正直焦っちゃった…。

うん、まだ好きな人はいない。…はず。

「あー」

思わず声をあげてお風呂に顔を沈める。

「…ぷはあ！」

…そろそろですよ。

お風呂から出て体を拭いているとお母さんが声をかけてきた。

「渚ー？」

「なーにー？」

「尋音くん来てるわよー！」

「ええ！？」

いきなり！？さっき一緒に帰ってきたばっかなのに！？
というか来てるならもう少し早く声かけてくれてもよかったのに…。

急いで部屋着を着てリビングに向かう。

「よっ渚」

「もー来るなら来るって言ってよー」

「ははっ迷惑だった？」

「いや別にそーいうことはないけどね…」

「…今日母さんが兄貴のところ行ってるから、夕飯は渚ん家でお世話になれって」

「あーそっか…：ならしょうがないね」

「それより、髪くらい乾かしてくればよかったのに。風邪引くぞ？」
「！」

わ、わ、忘れてたー！！
だって急いでたからー！！。

それに言うにしてもなんでそんなにニヤニヤしてるのー！

「か、乾かしてくるー！」

「ぶっ忙しいやつw」

まったくーこついうとこで素直に優しくしてくれれば尋音だっても
つとモテるだろうに…

「「ご飯もう少し時間かかるから上で遊んでいらっしやい」
「「はーい」」

そう言って自分の部屋に向かう。

そしてドアを開ければ…

「あつヒロ兄！」

「よっ美咲」

「なんで美咲はいつも私の部屋にいるの…」

「あーナギ姉もー」

「はいはい、ただいま」

美咲はほんとに尋音が好きみたいだ。

まあ私も海斗お兄ちゃんのこと好きだから、自然なんだろうけど。
早く治ればいいなあ。

「あ、そうだ。尋音。今日はどうだった？」

「ん？ああ。やっぱりこれからって感じかな」

「そっか…早く試合に出れるようにがんばってね」

「もち！」

「で、でさあ月海の話しな

「ヒロ兄絵本読んで！」

「おっいいよ」

「えへへ、ありがとー」

美咲め。いい感じにさえぎられちゃった。

「ご飯できたわよー！」

「「はい」」

「行こっヒロ兄ー！」

「おっー！」

結局話し出来ず…か。

まあ明日学校で月海も含めて話せいつか。

とりあえず…ご飯ご飯

第四話 好きな人？ — 渚視点 — (後書き)

これからも更新が遅れてしまうことが多くなってしまおうと思います。

詳しくは活動報告のほうに載せます。
ほんっとにすみません！

第五話 五年生 ー尋音視点ー

テニスクラブに入ってもう一年が経つ。

最近になってやっと試合に出れるようになって来た。俺はダブルスが主流で、この前誠司と組んで出た大会ではベスト4に入れた。

「ひざ高い。手首もつと柔らかくー。」

「分かってるよ!」

いつのまにか兄貴が俺のコーチ的なことになっていた。

俺も最初は気に食わなかったけど、やっぱり実力はかなりだったんだと思う。

一つ一つのアドバイスがすごく適切だもんなー。

だからこそ本当に残念だった。いつか兄貴を超える!って思ってたのに急に目標がなくなっちゃったんだから。

「もつと背伸ばせー」

「それは無理だろっ!」

「あー早くテニスしたいなあ」

「もー尋音そればっかだねえ」

声をかけて来た渚。

つい最近急に背が伸びてきて追い越されそうまでヒヤヒヤしてる…。

保険でならったけど今の時期は女子のほづが発育がいらいしい。

牛乳をのんでも全然背が伸びないなあ。

兄貴は今178だから、俺もそんなくらいいけるのかなあ。

「なーに考え込んでんの？」

「渚にはわかんない男の悩みだよ…。」

「ふーん。いろいろあるんだねえ」

渚。おまえも悩みの一つなんだぞ…。

「お！せーいじー！」

「あ、おはよう尋音。」

「なんだよー彼女も一緒に？」

「ち、ちがつ！別にまだそんなんじゃない！」

あきらかに月海が焦っている。よし、もう少しからかつか…。

「ま・だ？」

「！！！！！」

おーおー顔が真っ赤。

「沈みゆく夕日とかけまして、今の月海とときます。」

「その心は？」

お、渚がノってきてくれた。

「どちらも真っ赤でしょう」

「「ぶっ！くくくくーあーっはっはっはー！」」

俺と渚で大笑い。

あ、月海はうつむいちゃってる。さすがに言い過ぎちゃったかな…。

「尋音。さすがにひどい。月海に謝りなよ」

うつ！あんま表情からはわかんないけど今の誠司だいが怒ってる…。
ダブルス組んでたおかげかそういうのが分かるようになってきた。

「ご、ごめん月海」

「わ、私も…ごめんね月海」

「だって月海。許す？」

「うん…。」

な、なんだか誠司達冗談じゃなくていい感じになってんじゃ？

「ねえ月海たちさ…」

渚が小声でつぶやいてくる。どうやらおなじことを思ってたらしい。

「いい感じだよな…」

「うん。うらやましいなあ」

「渚ー！尋音ー！置いてくよー！」
「今行く！」

ってか月海機嫌治んの早っ！

さりげなく渚が言っていた、うらやましい。
もしかして好きな人でもいんのかなあ。
…気になる。

五年生は大変だ。高学年ということで下級生のお世話をしなきゃならない。

しかもよく分からないけど、男子は女子の、女子は男子とペアを組むことになってる。

「ひ、尋音…助けて…。」
「ねえ！せーじ先輩！遊ぼうよ！」

お、どうやら誠司はずいぶん元気な女の子と組んでるみたいだ。

「誠司先輩！遊んであげないとw」
「ひ、尋音ー」

誠司が引っ張られて行く。…まあこれくらいでテニスに支障は出ないだろう。

「ありがとうございます！」

二年生から挨拶を受けて、交流タイムが終わり。

疲れた顔をした誠司が近づいてくる。

「疲れた…」

「俺もいろんな意味で疲れた…」

「これが毎週、あと二ヶ月…」

「いやだー！」

「なっさけないわねー！」

「いいじゃん可愛くてさ。」

「そ、そりゃあかわいいんだけどさ…。扱い辛いつていうか…。」

「僕はすごく振り回された…。」

ほんとにぐったりだった。

「懐かしいなあ」

「兄貴はどうだった？」

「ん？まあ最初は仲良くなるの大変だったな。でも仲良くなれば懐

いてくれて可愛いもんだったぜ？」

「仲良くなるのが大変なんだってば……」

「俺は渚ちゃんも尋音もめんどろ見てたからそこまで苦勞はしなかったよ」

渚はほんとに昔はおとなしかった。

それこそ遥ちゃんと同じくらい。

その時はどろちゃって仲良くなったんだっけ……

第六話 遙ちゃん ― 尋音視点 ―

そしてまた一週間が過ぎ、悪夢の一日が始まった。

「すっげえ憂鬱なんだけど…。」

「尋音が憂鬱って言葉を知ってるってことに僕は驚いてる。」
「バカにしてるだろ」

「…僕も今日休めばよかったなあ」

こうやって誠司と嘆いてる間にも刻一刻と時間は過ぎて行く…。

「さあ二年生の子達を迎えに行ってください。」

先生の声と同時にみんなが席を立って歩き出す。

「行くか…。」

「…うん。」

俺も誠司を誘って教室へ向かう。

「相変わらず元気ないわねえ」

「月海達には分からないよ…。」

少し呆れた顔をしながら話しかけてきた月海と渚に誠司が力なく返す。

確かに男子と遊ぶなら簡単だけど女子と遊ぶってなにしたらいいのか分からないもんな。

「尋音は昨日何したの？」

「話して終わり。」

「ええ?! 遊ばなかったの？」

「だってなんか…うん。難しいんだよな」

「意味が分からないよ」

渚が苦笑する。でもホントに難しいとしか言えないって。

「せーじ先輩行こっ!!」

「…うん。」

…ご愁傷様。

「はぁ…遥ちゃん」

…返事を待って十秒。

でも返事はない。

「あれ? 遥ちゃん？」

次第に教室からは人がいなくなり、ついに誰もいなくなってしまうた。

カーテンの裏など探したが人がいる気配がない。

ちょうどそこへ二年生の担任の先生が通ったのでたずねても今日は普通に学校に来てたのだそうだ。

「…トイレかな？」

でも抵抗が…。

いくら人探したとしても、健全な私男子が余裕ぶっこいて女子トイレに入る訳にはいかないでしょう!!

…うーん、やっぱりちょっと見ただけじゃわかんないか…。…緊急事態だししょうがない!

「尋音何してるの？」

「ぎくっ!!」

今時ぎくって声出すって、オイ。

振り返るとそこには飽きた顔をした渚が。

「尋音…。まだ五年生なのに…」

「や、え、違うって!!」

「この状況でどう言い訳する気？」

「いや、実は…」

というところでとりあえず今の状況を話す。

「……なるほど。まだ手を汚そうとしてた訳じゃないんだね。」

「それは神に誓います。……ってか渚もどうしてここにいるんだよ」

「私のペアの男の子がお腹痛いって言ったからトイレまで一緒について来たの。」

「……そしたら尋音が」

あーそりゃあ勘違いしますよね……。

「で、見て来てくれないか？」

「うん！オツケーだよ」

渚がするりと女子トイレに入っていく。

渚があと数秒遅れて来てればなあ……。

ってダメだ！俺はそんな気絶対ない！

……と思いたい。

それからちよっとして渚がトイレから出てきた。……泣いてる遙ちゃんを連れて。

「！……どうしたの！？」

「……。」

きゅとけっこう泣いたんだろう。目が赤くなってる。

「……とりあえず教室行こうか？」

今なら誰もいないからきゅと話しやすいはずだ。遙ちゃんも「くりと小さく頷いてくれた。」

「あ、渚はペアの子ほうにいてやれよ」

「え、ああそっか。うん。出て来たら一応そっち行くね」

「うん」

教室に入ってとりあえず向き合うようにして座る。

「遙ちゃんどうしたの？」

「…。」

やっぱり泣き止んでくれなくてうつむいちゃってる。

俺が小2のころには泣くときにはすっげえ大声で泣いてその度に「うるさい！」って母さんに叱られてたな…。

やっぱり遙ちゃんは根っからおとなしいんだ。

「俺でよかつたら聞かせてくれないかな。少しなら力になれると思

う。」

「…。」

くうー！ガード硬いなあ！

「あ、あのさ」

「尋音さんは転校したことある？」

「…！しゃべってくれた！

まだ下を向いてるけど。」

「いや、ないけど…」

「私ね、今年の四月に転校して来たの。でも…」
「でも？」

「…。」

ありゃりゃ。また静かになっちゃった。

「ゆつくりでいいから聞かせて？ね？」

「も、もう、すぐ一ヶ月たつのに、とも、友達できなくて、み、みんな仲良し、さん同士で遊んでる、から、私、私だけ一人ぼっち」

…。そっか。俺はずっとここに住んでるし、ずっと友達には恵まれてたからそんな悩み一回も持ったことなかったよ…。

「…遥ちゃん。大丈夫」

「大丈夫じゃ、ない！」

「俺はもう遥ちゃんの友達だよ」

「…え？」

「ま、まあ遥ちゃんが嫌がるなら違つかもしれないけどさ、少なくとも俺はそう思ってるよ。」

「…ありがとう」

遥ちゃんがニコツと笑う。笑顔すっげえ可愛いじゃん！やっぱりもともと可愛い顔つきをしてるし、同じ年なら惚れちゃってるかも。

タタタッ！

その時男の子が走り寄って来た。この子は確か渚のペアの。…
と思ったら渚も教室に入って来た。

「ねえ！君名前は？」

「え？は、遥…内海遥。」

「そっか！俺は高坂建！こうさかたけるタケでいいよ！…こんなとこにいないで遊
びいこーぜ！」

「え、ちよ。ちよっと！」

「じゃ渚センパイ！俺たち先に行きますから早く来てください！」

「あ、うん」

そっいうと手を繋いで、というか手を引っ張るようにして走って行
った。

「はは…行っちゃったな。」

「あはは、そうだね。でもなんか懐かしいなあ…」

「え？」

「なんでもなーい。さ、私たちも早く行こー！」

「？お、おっ」

結局なんだったんだ？

…ま、いいや俺たちも行こっ。

「遙ちゃんってかわいい子じゃん」

「ん？ああそうだなあ。でもいろいろと大変だったんだなあこれが。」

「

「なにそれw」

あははーと笑いながら校庭へ向かう。

「あー！渚ー！尋音ー！」

「おっ月海じゃん！それに誠司も」

「どうしたの？みんなが集まって」

「俺が言ったんだ！みんなで遊んだほうが楽しいって！」

建くんが自慢げに言う。なるほどねえやってくれるじゃないか小2！

でも遙ちゃんはずこしもじもじしてるみたいだ。

よし！ここは俺が！

「はーるかちゃん！」

「！ひ、尋音さん」

「大丈夫だよ！自身持って！」

「で、でも」

んーそうだなあ。

…うん、こつしよう！

そしてみんなに遊びの提案をする。

「みんな！氷鬼やろうー！」

「「「「「さーんせーい！」「」「」「」

「でもちよつとルール変えるよ？」

みんなの頭の上にはてなが浮かぶ。

「氷状態から抜け出すためには、ただタッチするんじゃないくて、握手をしなければダメ」

「ええー！逃げにくくなっちゃっしょー」

「それが狙いだから」

まあ本当の狙いはべつにありますが…。

「じゃあとりあえずやろうか！鬼は……、よし！渚と建くんね！」

「よし！みんなつかまえるぞー！」

「ええー尋音ー！私走るの苦手なのにー」

「だから下級生相手でも丁度いいじゃん」

「！…ならいいよ！意地でもみんなつかまえる！頑張ろうねタケくん！」

「うん！」

ということでスタート！

スタートから十秒後に鬼がスタートする。

「待て〜！〜！」

「キヤーキヤー！」

みんながすごく楽しそうに走り回る。

やっぱこうじゃなくっちゃ！

「はい遙タッチ！」

「あっ早いよ〜」

お、遙ちゃん捕まっちゃった！

「はい！こつち！」

「え？」

遙ちゃんに一人の女子が手を出す。

それに少し躊躇したけど遙ちゃんもちゃんと手を出して握手をした。

「あ！逃げられちゃった！待てー！」

「ほら早く逃げよ！」

「あ、うん」

「私マコ！あなたは？」

「えと…遙」

「そっか！あ、来ちゃった逃げよ！遙ちゃん！」

「…うん！」

よかったー遙ちゃん大丈夫そうだ。

あのマコちゃんってたしか誠司のペアじゃ…

…うんまあきつとうまくいくだろう！

ちなみに狙いはここ！仲良くなるきっかけを作ること！

ここまでうまくいくとは…我ながら

「ターツチ！」

「げっ！渚！」

「ぼーっとしてるのが悪いんだよー！」

ちくしょー情けない！
あ、あれは！

「誠司ー！ヘルプ！」

「…無理。監視が厳しい。」

振り返るとそこには渚が。

「ごめん」

「薄情者ー！」

「誠司くん自分の心配は？」

「え！？」

渚が笑みを浮かべる。

気づいた時にはもう遅い。

「ターツチ！！！」

「建くん！」

「頭脳プレイだよー！」

「ナイス、タケくん！」

いつのまにこんな連携が…。

「尋音さん」

小声で誰かが俺を呼ぶ。あ、あれは遙ちゃん！

よし、渚が少し目をはなした時がチャンスだ。……………今だ！

「はい！握手！」

「ありがとう！」

その声に渚が気づく。でももう遅い！

「逃げられた！」

「ざーんねーんでしたー！」

一気に走り去る

「尋音、助けて…」

「さっき見捨てようとしたの誰だっけ!？」

「く…」

この時ばかりはペアなんてカンケーない！

楽しい時間も終わりが来て

「ありがとーございました！」

「また今度も氷鬼やろうねー！」

「約束だよー！」

二年生が教室に戻って行く。

「…小さい子も可愛いもんだな」

「えー？尋音前と言ってることが全然違っ！」

「はは、まあ楽しけりゃいいんだよ」

「助けてくれなかった」

「はは…テニス頑張ろうぜ…」

誠司はやっぱ不機嫌か…ってあれ？

一人でこちらを見て手招きをする女の子が。

「どうしたの？遙ちゃん」

走り寄って声をかける。

「あのね…今日はすっごい楽しかった！お友達もできたし、ほんたによかった！」

「そっか。よかったね」

「それでね、ちょっと耳かして」

なんだろうと思いつつも遙ちゃんの口元に耳を近づける。

チュッ

え？なんか今ほっぺに柔らかい感触が…。

「えへ。今日のお礼！じゃーね！」

走って戻って行く。

遙ちゃんも明るくなれてよかったなあ。

………つて！！！今キスされた？
マジですか？やばくないすか？

やばい顔が赤くなる！

「あれー？尋音顔赤いけどどうしたの？」

「あ、もしかして尋音ロリコン？」

「！！ば、ばつかじゃねえ！？月海はほんとにま、まったく！」

あれ？俺、動揺してる？

………つてロリコンではない！！！！

俺には好きな人が！…まだいないけど。

でもロリコンではない！うん！それは絶対！

「助けてくれなかった…。」

……うん絶対！！

第七話 海人お兄ちゃん ー 渚視点 ー

尋音がロリコンだとは……………（本人は全否定してるけれど…）

「ナギ姉ー」

「どうしたの？」

美咲が幼稚園の制服姿で部屋に入ってくる。

美咲は遥ちゃんと違って活発だからなあ…。

もしかしてそのギャップで尋音惚れちゃったのかな！

いやいやそれはないって〜。

でも愛に歳の差なんて…。

その前に三歳で歳の差って言うのかな？

っていつか！別に尋音のことがどうでもいいし！！うん！

でも見えちゃったんだよねえ…。

尋音が遥ちゃんにキスされてるの。

月海達は気づかなかった見ただけど、バツチリ見えちゃってた…！
それに顔真っ赤にしちゃって…！

もー今日のトイレの一件だって！（これまた誤解らしいけど）

いつからこんなにえっちになっちゃったんだろ…。

「ねえナギ姉聞いてるのー？」

美咲に声をかけられてやっと頭をもとに戻す。

「あ、ゴメンゴメン。なんだっけ？」

「もーすっかりしてよー」

「あはは…」

妹にまでダメ出しされちゃったよ…。

「でね〜」

「うん。聞くからその前に着替えて来たら？一緒に行こうか？」

「大丈夫だよ！私も来年から一年生だもん！」

そう言っただけで走って部屋から出て行った。

そっか…美咲も来年にはランドセルを背負うのか…。

五歳差だから一年しか同じ学校行けないけど

少し楽しみだなあ。

それから美咲の幼稚園のカワイイ恋バナを聞いて、夕飯を食べてお風呂に入る。

お風呂にはいるとすっごく癒される

ここまでお風呂好きだと、あのポケットに夢がいつぱいつまってる青いロボットのアニメに出てくるヒロインの女の子みたいだなあ。

体を洗っていると最近悩むことが…。

自意識過剰とか、ナルシストとかなんじゃなくて、正直私は太ってないしむしろ痩せてるほうだと思う。

でもスリムなのはいいけど…。

ふと、胸を見る。

「ここまでスリムなのはなあ…。」

確かにまだ五年生だしそこまでないのが普通なのかもしれないけど、成長する兆しすら見えない…。

今年の秋には林間学校ということで泊まりの行事がある。その時にはもちろんみんなでお風呂にも入ると思う…。

「月海はけっこう膨らんできてるんだよね」

ほんとにため息しかでないよ…。

ガーーーーッ

ドライヤーをかけるとシャンプーのいい匂いがする。これもお風呂

上がりだからできる特権だよね

「渚ー？」

「なーに？」

「海人くん来てるわよ？」

「はい！？海人お兄ちゃんが！？」

いきなり！？

「お母さん早く言っつてよあ〜」

とつか兄弟そろってタイミング悪いよ…。
さすが兄弟なのかもだけど。

「よっ渚ちゃん」

「もー海人お兄ちゃんー。」

「あはは、それにしてもお風呂上がりで色っぽいねえ」

海人お兄ちゃんがニヤニヤしてくる。

色っぽい…？

ついでさっきのことを思い出す。

「はあ…」

「あれどうしたの？悩み？」

「ううん、なんでもない。それより何かようがあつて来たの？」
「ん？久しぶりにかわいい妹ちゃんたちの顔が見たくなってね」

「実妹じゃないし…本音は？」

「暇つぶし？」

やっぱりね…。

「そーいや尋音は？」

「あ、ゴメンね？俺より尋音のがよかった？」

「そーじゃないってば！」

「冗談だつて」

もー。いつも海人お兄ちゃんは私のことからかかってばっか！

「あいつなら今素振りしてるよ」

「うっそ！尋音も頑張るねえ」

「そうだな…。まああいつもまだまだけど」

「ふふ、って言う割にはいっつも熱心に指導してるみたいじゃないですか海人コーチ」

いつだったか近くの公園で練習するのを見かけたことがある。それも一回じゃない。

やっぱテニスしてる尋音はすっごく楽しそうで、それを教える海人お兄ちゃんもすっごい輝いてた。

スポーツしてる男の人ってやっぱカッコいいし、憧れちゃう。私ももつとできればなあ…。

「俺はあいつの体を借りてテニスしてるんだよ。」

海人お兄ちゃんが少し真剣な顔で口を開く。

体を借りる？

「どういうこと？」

「俺事故ってテニスできなくなっちゃったじゃん？」

「う、うん」

リハビリしても日常に影響が出ない程度まで回復したけどやっぱり運動は厳しいみたい。

「それでさ、まだヘタだけど体だけはやたら丈夫な尋音が丁度そこにいたのさ」

さっきに比べて笑顔だけどそこには少し寂しさが見える。

「で、俺の全部をあいつに叩き込んで。俺のテニスにかけた10年全部をね」

「なるほど…。」

「それであいつには俺の夢を託す。…それで俺はあいつの体を借りて夢を叶える！ってな」

「夢？」

「プロ。」

プロ。そんなに簡単にはいかない夢。普通なら冗談にも思ってもおかしくない、それくらい難しい夢。

それを海人お兄ちゃんは本気で目指してたんだ。そして同じ夢を尋音は追ってるんだ。

「かつこいいね。なんか」

「あれ？俺に惚れちゃった？」

「ありえません。」

「こういう軽いとこがなきゃホントにかっこいいのよ。」

「あ、今の話尋音には絶対内緒ね」

「やっぱり少し恥ずかしいのかな？」

「普段はケンカもしたりするけどやっぱりすごく仲いいんだよね。」

「了解です」

「よろしくー。じゃ俺ももう少しあいつのことしごいてくるかな？」

「あはは。頑張ってね」

「うい。じゃおじやましましたー！」

海人お兄ちゃんが席を立つ。

「あら、もう行くの？」

お母さんがキッチンから顔を出す。

「うん。突然すみませんでした」

「まあいいのよ？また来てね？」

「うん、ありがとう」

そう言って海人お兄ちゃんは帰って行った。

「夢…かあ」

頑張っ
てね、
二人とも。

第八話 林間学校！ ―尋音視点―

青かった葉が赤く紅葉して…って言うけど夏の葉っぱって緑じゃないか？

なんてのはおいといて、スポーツの秋！食欲の秋！読書…は、いらない！！

そして今年の秋には…

「それでは出発します！」

はーいっ！とみんなの元気な声が響く。

そう今日が林間学校の一日目。泊まり行事なんて初めてだし楽しみだなあ。

「尋音は何コース？」

「ああ、俺はなんか川で遊んだりするコース
誠司は？」

「僕は水晶探索コース。」

「へえ面白そうだな」

今回は四つのコースに分かれて行動することになっている。

一日、二日目は、このコースごとに分かれて行動、三日目はひたすら登山。それで四日目に帰宅。という日程だ。

ちなみに四つのコースは

一つ目は誠司が参加する、水晶探索コース。

まあとりあえず水晶がありそうなところで探すらしい。去年の先輩はけっこう大つきめなのをゲットしたらしい。

二つ目は俺が参加する、清流コース。けっきょく川で遊ぶだけのやつ。今の季節暑いし楽そうだから選んだただけだ。

三つめは挑戦コース。要は、三日めにみんなで登る山より高い山にチャレンジしよう！
ということだ。

四つめは森林散策コース。森のなかの植物や虫を見たりしているいる学ぶコース。ちなみに一番希望者が少なかった…

バスに乗り込んで、校長先生に見送られながら出発する。

「今のうちに寝たいほうがいいぞー」

先生から声がかかる。

だいたい目的地までは三時間弱で着く。

確かに時間がけっこうある。

「ねえねえ尋音くん」

席が隣の女子が話しかけてくる。

この女子は月島つきしま星香せいか。

女子サッカークラブに入っていて、五年生で正キーパーになったらしい。

外スポーツなのに肌が白いのはやっぱり気を使ってるからだそうだ。

「なに？」

「今日楽しみだね！」

「だな。でも川でなにすんの？」

ちなみに月島も清流コース。

「えー？それはやっぱり魚とったりー水遊びとかとか！」

「そっかー。うーん今から楽しみになって来た！」

「でしょでしょ！？」

月島は明るい性格でけっこうみんなから好かれるタイプだ。

「じゃ思いっきり遊ぶためにも今のうちに寝とこうぜ」

「うん！おやすみー！」

ガバツとリュックを持ってそれに頭を伏せる。

もう寝る体制完了ですか…。

さ、俺も寝るかな。

「月海！重いつて」

「眠いんだから寝かせてよー！」

「僕の方に頭乗せることない……」

「男なんだからつべこべ言わない！」

寝よつ寝よつ。

「ん？」

ふと目が覚める。そろそろ着いたかな……。
目をはつきりと開けると目の前に月島の顔が。

「うわああ……！」

思わず大声を出してしまい、周りで寝てた人も驚く様に起きてこっちを見てくる。

ゴメン、とジエスチャーをしてみんなが視線を元に戻す。

「月島なにやってんだよ〜」

「寝顔見てただけだよ？」

「だけ、じゃねえわ！つたく…。で、今どの辺？」

「あと三十分くらいだつて。」

「そっか。…じゃそろそろ準備しますか」

「うん。…尋音くんの寝顔ってかわいいね」

「っ！」

はいいいい？！

「なに言ってるんだよ！」

「あれ〜？照れてんの？」

月島がニヤニヤしてくる。

あ〜もっからかわれてる気がして嫌だ！

「さっさと準備！」

「は〜い。」

…まったく。

「ふあゝあ」

誠司があくびをする。

「眠い？」

「全然寝れなかった。」

「はは…」

それもそうだろうね。

それに比べて…

「渚ー！着いたね！楽しみい！」

月海はすっごい元気だ。

養分吸い取られたか誠司…。

その後三泊の間お世話になる民宿の役員の人にあいさつして荷物を大っきめなホールに置き、いよいよ出発！

「では今日一日みなさんのお手伝いをします佐々木です、よろしく
お願いします」

「」「よろしくお願いします！」「」「」

「はい。さっそくこの川に向かいますのでついて来てください」

佐々木さんが地図に指を指して川の位置を示す。そこまで奥には行かないみたいだけど

五十分くらい歩くらしい。

「ひーろと」

渚が話しかけてくる。ああそついえば渚も同じだったな。

「どした？」

「いや、最近テニスのほうはどうかなって思ってたさー」

「ん？もうすぐまた大会あるよ。でも俺たちシードもらってるから今度こそ優勝！ってね。」

「そっかー！頑張ってるね！」

「おー！………でさー」

少し渚と話し込む。

そっからちよつと歩いて少し疲れてきたな。って思っていたら水の音が聞こえてきた。

「おおー！」

率直な感想、きれいだ！

まあうちの近くにも川はあるんだけど流れが速くて入れないようになっている。

だから実際川遊びなんて久しぶりだったり。

「きれいだねー！」

となりで渚が目を輝かせながら言う。

分かりやすいな。

思わずぷつと嘔き出す。

「どうしたの？」

「なんでもなーい」

今度は頭に？を浮かべている。渚ってたまにこういっ子供っぽいところあるよな

「…では、水の中は滑るので気をつけてくださいー！」

「よーし入るか！」

靴と靴下を脱ぎ捨てて、ズボンをまくって川に入る。

「冷てえー」

今の季節にはぴったりな気持ちよさではないけどまだまだあつつかから全然オツケー！

「見てみてー！魚いるよー」

「お！ど！ど！ど！」

昔はよくこつやって渚と遊んだっけな。
まあ昔を懐かしむほどまだ生きてないけどな

「尋音くーん！」

「んー。どした？」

今度は月島が声をかけてくる。

「ほら！ジャーン！」

「おおっすげー！」

月島が見せてきたのは簡単にいえば魚を捕まえるための仕掛け、トラップだ。

石を積み上げて壁を作り、その壁を両側に挟んで、スーパーのレジ袋が仕掛けられている。けっこう手がこんでいるなあ。

「これ一人で作ったの？」

「うん！ちゃーんと設計して準備してきたからね！」

「すげー！」

「でもこれだけじゃ魚は集まんないから…こつやって…」

月島がそのトラップの少し向こうから手で魚を誘導するかのようにとどんと罠へと近づけて行く。そして…

バシャ！

水のいい音がして、レジ袋の中には見事に魚が入った。

「すっげー！！月島天才！？」

「えへへーもつとほめてー」

「佐々木さん！これなに？」

「うーんヤマメだな。でもまだ小さいから川に返してあげたほうがいいよ。」

「えーせっかく捕まえたのにか」

「しょうがないよ、かわいそうだから」

そういうと月島は袋を逆さまにし、ヤマメを川へと戻した。

水に戻れて元気を取り戻せたヤマメは元気に、素早く泳いで行った。

「じゃ次のターゲットに行きましょう！」

「おー！次俺にもやらせてよ」

「うん！」

よし！月島を超えてやる！！

そうして遊んでいるうちに時間があっという間に過ぎてその日の活動が終わりになった。

結局俺は二匹、それもちっさいヤツ。

月島は五匹。そのうち三匹はけっこう大きめだった。まあ持って帰

つてもしょうがないから戻したんだけど。

「明日は絶対に負けないからな〜！」

「ええ？どうせまた二匹でしょ？しかも

こーんくらいのやつ」

月島が手で大きさを示す。くー！実際そんなくらいのやつしかとれてないから言い返せないのが悔しい！

「でも次は違う川に行くんだろ？」

「うん」

「なら俺に勝利の女神が微笑むかもしんないぞ！」

「えー？どうかなあ」

結局月島には一日中からかわれっぱなしだったけど…でも明日は見返してやる！

そこからまた来た道を50分歩いて帰る。

遊んだあとだったからかなりしんどかった。

宿舎にもどると部屋割が掲示されていた。

「えーと俺は…と。」

あ、あつた！誠司と、あと雄星か。

「尋音お疲れ」

「あ、誠司、と雄星か…」

「なにになに！？なんでそこでテンション下がんの！？」

こいつは平山ひらやま雄星ゆうせい。

よく言えばノリがよくて面白いやつ。

悪く言えば軽いやつ。俺は後のほうだと思ってる。

「まあまあ三泊四日を共にするんだから仲良くしようぜ！」

雄星の歯がキラんと光る。

「…さ、荷物部屋において、夕飯の前に風呂だっけか？」

「うん。行くう。」

「ちょ、ちょっと無視はないでしょー！」

まあ面白くなりそうだ。

いくら雄星でも超静かで話しづらいやつよりはマシっしょ。

「おおー風呂でっけえー！」

「うん。」

「部屋もけっこう立派だったしな！」

「じゃあヒロ！思いつき飛び込むか！」

「さ、最初に体洗うのが常識だよな」

「連れないなあ」

「はは。でもそれがマナー。」

「誠司の言うとおり！」

「ブーブー！」

まあ楽しくなりそうだ。

第九話 隠し事 ― 渚視点 ―

ちやぽーん

「お風呂が大つきい!!」

月海が興奮してる。私も家のお風呂よりずーっと大きいお風呂に感激!

でもやっぱり気になるよね…。

「ほら!渚!なに隠してんの!」

「ちよ、月海!」

タオルで隠してたのを剥ぎ取られる。

あーもうこんな情けない!

どうせまた月海にバカにされるんだろうなあ。

「…いいなあ」

「へ!?!」

月海からでてきた言葉は意外だった。

「な、なななんぞ?」

「えー?だって超きれいじゃん!」

「でもなんか情けないし…!」

「そんなことないじゃん！ほら私なんてちょっと太ってきちゃって…」

ほら、と月海が見せてくる。でも月海はスポーツ得意で筋肉がついてるから引き締まって見えるし全然太ってないと思うんだけど…。

「まあまだまだこれからだよ！大人の女になっていくには！」

「月海〜」

今日は月海がすっごくかつこよく見えるなあ。

「じゃ私先に上がるね〜！」

「あ、うん私も少ししたら行く〜」

月海が先に浴場から出て行く。

確かこの後は夕ごはんだけか。

「ねえ渚ちゃんちょっといい？」

「あ、星香ちゃん」

星香ちゃん今日楽しそうだったなあ。

…尋音と。

「あのさ、渚ちゃんって尋音くんと仲いいじゃん？」

「え、っと、まあ、うんそうなるのかな」

「私尋音くんのこと好きなの。」

ふーんそっかあ。……………え？

「ええええええ！」

「ちよつと、シー！」

星香ちゃんが口の前で人差し指を立てて注意してくる。

「あ、じ、ごめん」

「いいよ。で、そこで、なんだけどさ。渚ちゃんに協力して欲しいのさ〜」

「何を…?」

「尋音くんとうまくいくようにいろいろ手伝って欲しいんだ！」

「え…」

「お願い！」

両手を握って目を見つめられながらお願いされる。

え、つとその前に服着させてください。

今は上半身裸とちよつと恥ずかしいかつこつになっている。

「うん、いいよ」

「ほんと!?!」

星香ちゃんが目をキラキラさせて見つめてくる。……………かわいいなあ。星香ちゃんはかわいいし、明るい性格だし、人に好かれるタイプだし、長い髪はきれいだし、うらやましいところだらけだ。

そんなひとに好かれるなんて、尋音もモテるなあ。

その後のご飯も結局そのことを考えてて味がわからなかった…。

部屋に戻るとベッドに月海が横になっていた。

「あ、渚！」

「月海」

「…なんかさっきからずっと考え事してない？」

「！」

やっぱり月海にはお見通しか…。

さすが親友だね。

「なんか悩みでもあるなら話してよ、ね？」

「月海」。あのね実は…。」

と言いかけたところで言葉がつまる。

『絶対に誰にも言っちゃダメだよ!』

あ、星香ちゃんに口止めされてたんだった。

「ゴメン! やっぱなんでもない!」

「え?」

「あはは、どうでもいいの。なんかゴメンね」

「ホントに?」

「本当にホント!」

「ならいいんだけど…」

月海ゴメン。

私嘘ついた。

でも約束は破れないもんね…。

「それでは今日はこの川で活動したいと思います！昨日より川幅が
広くて少し底が深いところもあると思うので、気をつけて遊ぶよう
にしてください！」

佐々木さんから注意事項などが話されて二日目の活動に入る。

ここに来るまでに星香ちゃんといろいろ話した。

78

「今日は勝負することになってるから楽しみだなあ！」
「そっかあ」

「それでね！帰り道になったら尋音くんにいろいろきいて欲しいん
だ」

「いろいろって、好きなタイプとか？」

「うん！さっすが渚ちゃん！わかってるね！」

「あはは、うん任せて」

「お願いだよ！」

と、その後も好きになったキツカケとか、

恋ばなをした。

「今日は絶対負けないぞ!!」

「どうかなあ？」

あはは!と星香ちゃんと尋音が楽しそうに遊んでる。こうして見るとやっぱお似合いなのかも。

「ヤッホー渚!」

「あ、雪乃ちゃん!」

元気なこのひとは三浦^{みづら}雪乃^{ゆきの}ちゃん。私は背がクラスの中でギリギリ前から数えたほうが早いくらいの高さだけど、雪乃ちゃんはダントツで1番前。

髪型はツインテールで、なんとなく美咲と似てる気がするからなかほつとけないっていうかちょっと危なっかしいところもあるんだよね。

ちなみに宿舎で部屋が同じ。

「もー!ちゃん、はダメだって言ってるじゃん!」

「えーでもさー」

「ユツキーでいいんだよ?」

「…雪乃?」

「…まあそれでいつか。」

「俺も仲間に入れてよ！」

「雄星くん」

「あ、ゆうちゃんじゃーん！」

「よ、ユッキー」

つてアダ名で呼び合ってるんだ！

「ちょ、ちよつとバカ！」

「あ、ゆうちゃん危ない！」

川の中で追いかけてつこをするように遊んでたら、足を右につまずかせた雪乃が転びそうになって、その方向に運悪く雄星くんがいて、見事に衝突！

二人して転んじやったよ…。

「だ、大丈夫？」

慌てて二人のほうに駆け寄る。

「うちは平気…。」

「俺はダメかも…。」

「あはは！二人ともビショビショ！」

「もー渇〜！えい！」

「ちょ、冷たいっ〜」

「ユッキーどいてよ〜」

そうやって三人で楽しく遊ぶ。

やっぱり楽しまないかね！

「ちょ、俺トイレー！」

「そういうことはうち達に隠れて行きなよー！」

あはは、この二人のいいコンビかもね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5172y/>

心の奥の扉の先の可能性

2012年1月13日15時45分発行